

305. 平成13年度滋賀県下における 発掘調査の紹介（その1）

本年度も滋賀県内では多くの発掘調査が実施され、貴重な成果を上げています。その成果の情報交換の場として、平成14年3月8日「第80回滋賀県埋蔵文化財センター研究会」が開催されました。ここにその発表を紹介いたします。

なお、お忙しい中、ご協力いただきました方々に厚くお礼申し上げます。

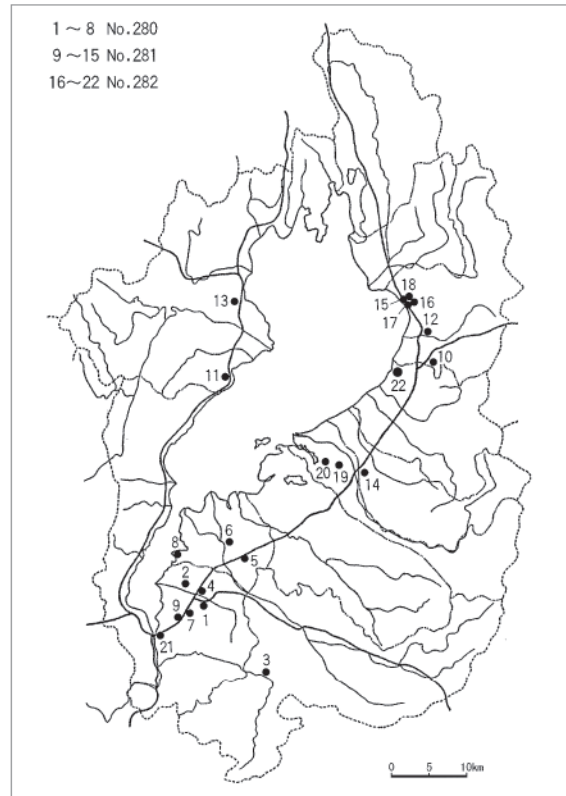
1. 弥生後期の川跡と中世の水田跡を検出 草津市 柳 遺跡

柳遺跡は草津市の中央部を流れる草津川の左岸、草津市青地町に所在する。これまでの発掘調査から、弥生時代～鎌倉時代の集落跡として周知されている。今回の発掘調査は、草津川放水路建設工事に伴うもので、弥生時代後期の自然河道と鎌倉～室町時代の水田跡を検出した。

弥生時代後期の自然河道には堰が設けられており、そこから分水する人工溝も検出された。この分水溝は矢板杭で護岸された水溜状遺構に流れ込み、さらに下流へ延びるとみられ、下流側には水田が存在していた可能性が考えられる。また、堰は検出状況から少なくとも2度の改修がされていたことが確認でき、当時の人々にとって重要な存在であったことがうかがえる。さらに、この自然河道からは多くの弥生時代後期に属する土器とともに大量の木製品や未製品類が出土している。木製品には直径80cmを超える大型の臼や朱塗り盾、朱をこねたと思われる大型の鉢、鍬や鋤などの



川跡から見つかった大型の臼



遺跡位置図（位置図の番号は本文と同じです）

農具や建築部材などがある。

鎌倉～室町時代に比定される水田跡は5回の変遷を確認した。田面の上には洪水砂の堆積がみられ、数回にわたる洪水被害を受けていることがわかった。この洪水砂を取り除くと足跡や鍬・鋤による耕作痕が検出された。水田面や畦畔は洪水砂等の堆積の進行に伴い、順次上面へつくり替えられている。また、大きな洪水被害を受けた後には水田全域にわたって復旧されていることから、かなり組織だった復旧作業がされていたと推測される。なお、水田耕作土に含まれる花粉を分析したところ、稲のほかにソバやゴマが栽培されていたことがわかった。

また、今回検出された水田の区画割は粟太郡統一主条里（N38° E）にのるもので、当地においては13世紀中頃に統一一条里が施行されていることがわかった。

（助滋賀県文化財保護協会 坂口健太）

2. 南北の広がりが見える中世集落が出土 草津市 宮前遺跡

宮前遺跡は草津市川原町に所在し、平成12年度の調査では葉山川の左岸で鎌倉時代の集落跡が検出された。今回の調査では鎌倉時代の集落が南へ約500m広がることを確認され、集落の南限も確認された。

集落内は溝によって屋敷地が区画され、掘立柱建物・井戸・土壇墓などが検出された。井戸は、曲物を3段～5段積み重ねた井筒をもつものがあつた。土壇墓は棺の底板と思われる板材が出土し、黒色土器と土師皿が副葬されていた。



曲物が5段設置されている井戸の断面

検出された溝や掘立柱建物等の遺構は、いずれも当地域に広く遺存する条里制の土地区画と同じ方向の主軸方位をとり、現在見られる景観が少なくとも鎌倉時代頃から続いていることが判明した。

(財滋賀県文化財保護協会 重田 勉)

3. 信楽焼の窯跡3基を調査 信楽町黄瀬 金山遺跡

第二号神高速道路建設に伴い、約1,600㎡を対象に発掘調査を実施した。調査の結果、16世紀中頃の信楽焼の窯跡3基を検出した。

3基の窯跡は、重なり合いながら1→3→2号窯へと順次構築され、操業されていたことが判った。この内、1、3号窯は花崗岩の岩盤を削り貫いた地下式であるが、最も新しい2号窯は岩盤を一段下げるのみで側壁および天井を架構する半地下式であった。何れの窯体にも、主軸に「分焰壁」と呼ばれる壁が設けられている。分焰壁は信楽特有の構造で、16世紀代を中心とする時期にみられるものである。天井高は約1m、焼成室床面積は何れも15㎡前後である。金山遺跡では、新たな窯を築く際に前の窯を埋め込んでいることから、灰原（操業で発生した灰や焼き損じた製品などの層）は、後の操業で乱されることなく、良好に残されており、1号窯では7層、3号窯では8層を確認し

た。床面の補修もほぼ同様の回数であった。実際の操業は、より多いと思われるものの、それぞれの窯で10～20回程度用いられたに留まる可能性がある。

これらの窯の製品は、壺・甕・播鉢・水指・茶碗・土錘がみられる。茶碗等が僅かに出土しているため、茶陶も生産していたことが判るが、生産全体から見ると、さほど多いとはいえない。むしろ、最も多く出土しているものが播鉢であることから、主に庶民の日常生活に根ざしたものを生産していたことが判る。



1号窯の全景（右上は2号窯）

(財滋賀県文化財保護協会 畑中英二)

4. 弥生時代後期の土器埋納柱穴を確認 栗東市 小柿遺跡

小柿遺跡は、栗東市六地蔵の古琵琶湖層に源を発する葉山川左岸の中流域に位置し、弥生時代～古墳時代の拠点集落である中沢遺跡や大型建物で著名な下鉤遺跡に隣接する。過去の調査では、古くは縄文時代後期初頭の集落にはじまり、平安時代～鎌倉時代の集落まで確認されている。

今回の調査は民間の宅地開発に伴うもので、小柿遺跡の中心よりやや東にあたる。この付近は、約100mほどの範囲で、弥生時代後期後半から古墳時代初頭を中心とする竪穴建物や掘立柱建物などが確認されており、近年集落の様子が少しずつ明らかになりつつある。

調査の結果、竪穴建物、掘立柱建物、溝、土坑、ピットなどが確認された。竪穴建物は3棟確認されており、内1棟の土坑から鉄器片が出土している。建物プランは、方形もしくは多角形状をしており、長辺が約4.5～5mのものである。全体に削平が著しく、比較的残りのいいものでも深さが検出面より10cm程度である。掘立柱建物は2棟以上確認されている。全体がわかるものでは、2間×1間（約4m×2m）で建て替えた痕が見られる。遺構で注目されるのは、建物の柱の中

に土器を埋納したものが3ヵ所確認されたことである。ひとつは竪穴建物の主柱穴で、鉢（扁平甕）の中に短頸壺を入れた状態で確認されている。また掘立柱建物の柱穴と思われるピットには、長頸壺を正位置に据えて埋納したものと、土器を割って埋納したものが確認されている。柱が抜かれた後に土器を埋納していることから、建物を廃絶する際に何らかのまつりが行われ、そのときに使用された土器が埋められた可能性が推定できる。当時の習俗や儀礼を検討していく上で貴重な資料である。



土器埋納柱穴

(栗東市文化体育振興事業団 近藤 広)

5. 弥生後期～古墳前期の土壌墓群 野洲町 小篠原遺跡

今回の調査は、土地区画整理に伴う大堀川改修工事に先立ち実施され、約4,500㎡を2002年2月から11月まで発掘調査をしました。

今回発見された土壌墓群の脂肪酸分析等を行った結果、動物遺体が埋葬された可能性が指摘され土壌墓であると判断した。

土壌墓群は西南から東北方向に向かって逐次掘削されたと考えられ、東北に向かうに従って遺構密度が高くなり、小型化する傾向にある。

土壌は基本的に平面形は円形または楕円形（径150～90cm）、断面形はやや逆台形（深さ50から100cm）を呈している。

土壌墓上面には必ず炭層がみられ、藁などを燃やして炭を敷詰めており、土器を有する土壌墓は少なく全体の1割程度で基本的には、1土壌に甕1個である。

野洲町内（野洲川右岸）の弥生集落は、守山市、栗東市（野洲川左岸）地域に比べ極めて小規模な集落や方形周溝墓群が発見されたのみであり、規模の大きな集落は存在しないかと考えられていたが、今回の土壌墓群は周辺の未発掘地域を含めると1,000基以上穿たれていると推定され、大規模集落の存在が予測されるようになった。



調査区全景（南より）

(野洲町教育委員会 杉本源造)

6. 古代寺院伝承地から多量の瓦片出土 中主町 八夫遺跡

八夫遺跡は野洲郡中主町の南東部に位置し、調査地は現在の八夫集落のある微高地上に所在する。付近は以前から古瓦の散布で知られており『近江の古代寺院』には「八夫廃寺」として紹介されている。

調査は個人住宅建設に先立って実施したもので、調査区の面積は約150㎡である。

検出した遺構は、掘立柱建物跡4棟、溝7条、井戸2基、ピット多数であった。掘立柱建物は4棟とも重なって検出され、4度の建て替えが行われたものとみられる。そして、検出した溝では、幅が1.5m～2.0mの調査区内で直角に折れ曲がる、区画溝が認められた。この区画溝内から多量の瓦片が出土した。



調査区全景

出土した瓦やその他の遺物の総量は、整理コンテナ60箱に及んだ。瓦の時期はおおよそ7世紀末～8世紀初頭であるとみられるが、他の遺物は9世紀後半から11世紀前半までのものが中心で、遺物跡と瓦の関係は今後検討を要する。これ以外には奈良三彩の出土が注目に値する。

中主町域では現在でも野洲郡統一条里に伴う地割が顕著であるが、調査地周辺では一部正方位の地割が認められ、今回検出した建物跡や区画溝も正方位を意識している。また、瓦片や奈良三彩の出土など、寺院の

な様相も認められ、周辺への遺構の広がりや、平面的な位置関係など、今後の調査成果には興味深いものがある。

(中主町教育委員会 福永清治)

7. 平安時代の土器埋納遺構を検出 草津市 矢倉古墳群

矢倉古墳群は、草津市西矢倉三丁目一帯に所在し、近接する神社境内に古墳が残っていることなどから、古墳時代後期の古墳群として周知されてきた。今回の調査は、分譲住宅地造成に先立つものであり、開発対象地のうち、1,850㎡あまりの調査を実施した。

主な遺構として、平安時代の掘立柱建物8棟・井戸2基・土器埋納遺構9基、奈良時代の土器を大量に廃棄した土坑1基、その他、奈良時代から平安時代頃の柱穴や土坑、溝が検出された。

特に注目される点として、2棟の掘立柱建物の柱穴に近接する位置や建物の柱筋上に、大量の土師器杯・皿が意図的に埋められた小土坑が合計9基見つかったことがあげられる。この小土坑は掘立柱建物に関連する遺構であり、建物を建てる際に地鎮のために土器などの遺物を埋納したと考えられる。また、その内1基からは土師器皿10枚あまりとともに、皇朝十二銭の一種である延喜通宝が約20片出土している。出土した遺物を検討したところ、概ね平安時代中頃の遺構であることが判明した。



土器埋納遺構（南東より）

今回の調査は、矢倉古墳群における初めての面的な調査であり、古墳や古墳時代の遺構は検出されなかったものの、従来想定されていなかった奈良～平安時代の集落が調査地一帯に存在することが明らかになり、周辺の同時期の遺跡との関連性を考える上で、貴重な成果が得られた。

(草津市教育委員会 島津知子)

8. 弥生時代前期の遺構と遺物を検出 草津市 烏丸崎遺跡

烏丸崎遺跡は、1984年に工事用道路5号線建設に伴い調査された地点で、これまでに県教育委員会による湖岸堤（湖岸道路）および烏丸半島整備・浚渫工事に伴う発掘調査が実施されてきた。その結果、半島一帯で弥生時代の方形周溝墓群や玉造工房など各種の遺構・遺物が検出されている。

今回の調査は、遺跡発見の契機となった道路（市道下寺下物線・夕映街道）の拡幅工事に伴うもので、市教育委員会の実施する烏丸崎遺跡発掘調査の第5次調査にあたる。1～4次調査においては、湖岸道路との交差点から東に600m付近までを調査し、溝・土坑・柱穴・円形堅穴住居1棟などを検出し、これらの遺構より縄文時代晩期から近現代にかけての遺物が若干出土している。

今回の調査によって、弥生時代（前期・中期）・古墳時代・奈良時代・鎌倉時代・近現代の遺構を検出し、土器・石器・木器などの遺物が出土した。古墳時代・鎌倉時代の遺構はごくわずかで、多くは一様式新段階を中心とする弥生時代前期の遺構である。溝や土坑などからこの時期の土器が多量に出土した。弥生時代中期の方形周溝墓は一部を検出したのみであるが、一辺12m溝幅3m程度の規模で2基が並列する。これらの弥生時代遺構は調査地中央付近より西側にのみ分布しており、烏丸崎遺跡における弥生時代の遺構範囲の一端を確認することができた。また、調査地の東端では奈良時代の掘立柱建物の一部を検出した。建物は規模が大きく（柱穴の直径80cm）、東に底を持つ。付近からは土器・転用硯・瓦などが出土しており、この時期の遺構がさらに東に続くものと考えられる。近現代の遺物には柱穴底部に埋納されていた墨書板2枚がある。それぞれ片面に「第八五号 □守カー二・コ二」「小野 一六十六号」の墨書があるが、意味不明である。遺跡の調査は次年度も継続される予定であり、今後の成果が期待される。



調査地全景（南東から）

(草津市教育委員会 宮崎 歩)